

藩政文書にみる加賀橋梁考

A Study of Bridges through laws and literatures of the kaga Domain

門田信一^{*2}、竹谷栄一^{*3}、山崎廣志^{*3}、安達實^{*4}、松田洋一郎^{*5}、鳥居和之^{*6}

By Shinichi MONDA, Eiichi TAKETANI, Hiroshi YAMAZAKI,
Makoto ADACHI, Youichirou MATSUDA and Kazuyuki TORII

概要

江戸時代に入り、社会が安定してくると人や物の動きが盛んになり、道づくりや橋の建設（今で言う道路整備）が進み、管理体制も整うようになってきた。
ここでは加賀藩における橋梁の建設や維持管理に関わる事柄について述べる。

1. はじめに 藩政期における加賀藩の橋梁

加賀藩の城下町金沢市内を流れる二つの川は、南は犀川が北は浅野川で、この二つの流れは、城下町金沢の城を守るように挟み、あたかも天然の防衛の堀となっている。

この河川に架かる橋梁は、当時は城下町の防衛のため、浅野川には浅野川大橋と浅野川小橋、犀川には犀川大橋のみで、他は防衛上の見地から橋を造ることを許されなかった。両大橋とも城下町中心部を貫く当時の「北国街道」に架かる重要な橋で、参勤交代にも使われてきた。これらの橋の資料については、『加賀藩史料』に残っている。

『加賀藩史料』は、加賀藩研究の基本史料である。全18巻（本編15巻、藩末篇2巻、編外1巻）からなり、1538（天文7）年初代藩主・前田利家の誕生から、1871（明治4）年廃藩置県まで330余年間の藩政記録である。今回は本史料と金沢市史資料編から15件取り出した。また隣りの富山藩の資料も1件取り出した。加賀藩の史料は年代順に載せた^{1)～9)}。

2. 橋に関する文書

(1) 初めて橋を架設

1594（文禄3）年9月

加賀藩史料第一編（国初遺文）より

「前田利家金沢犀川・浅野川両大橋の架替に関して、書を町奉行に与ふ」

初代藩主・前田利家の文書で、金沢の中心にある両大橋は、文禄3年に架けたと言われている。橋材調達や人足など詳しく述べられている。なおこの文書では、「架替」になっているが、これまでこの橋に関する文書がないことから、実際は「架設」が適当であったと思う。

翌10月、橋の架設を命じた前田利家に感謝するため、金沢の町年寄が伏見に来て礼を述べた文書が残っている。

(2) 橋の改築負担

1625（寛永2）年5月

加賀藩史料第二編（御定書）より

「金沢の侍町に於ける橋梁改築の法を定む」

侍町方橋掛直之事が出され、架け替えの負担が示されている。内容は、次のとおりである。

- ①その町で行き止まりの橋は、その町で架ける。
- ②その橋より2～3町（1町は約100m）先で行き止まりの場合公儀（公的）で橋材支給、その他の人夫人用はその町で負担する。
- ③行き止まりのない往還の橋などは公儀負担とする。

(3) 管理（その1）

1633（寛永10）年8月

加賀藩史料第二編（国事雑抄）より

「金沢の両大橋上の荷物運搬に関する法規を定む」

橋上の荷物運搬については、橋面を傷つけないように取り締まりが強く行われた。

(4) 管理（その2）

1661（寛文元）年7月

加賀藩史料第三編（改作所旧記）より

「荷馬を犀川・浅野川の橋爪に繫留するを禁止す」

犀川・浅野川橋詰に、柴枝などつけた馬が繫がれるこ

* Keyword 江戸期、加賀藩、橋梁管理

* 2 非会員 (株) アステック

〒924-0071 白山市徳光町 2400-6

* 3 非会員 中日本ハイウェイメンテナンス北陸(株)

* 4 非会員 博(工)(株) アステック

* 5 正会員 石川県

* 6 正会員 工博 金沢大学 理工学域

とがあり、通行人に迷惑をかけることから、橋詰に馬や荷馬を繋がないように、御算用場から十村（加賀藩における役人の職名）へ申しつけられた（図－1 参照）。

（5）架け替え

1689（元禄2）年8月

加賀藩史料第五編（参議公年表）より

「犀川の大橋修繕を命ず」

担当する作事奉行を任命し、修繕に取り掛かった。工事の間は仮舟橋（14～15艘）を架けて住民の往来には不便とならないようにした。工事は約1ヶ月後に完成したと記されている。

（6）橋梁新設の請願

1743（寛保3）年10月

加賀藩史料第七編（加州郡方旧記）より

「浅野川小橋下に一文橋を架する許可を請願す」

城下町金沢の浅野川に架かる小橋（無料の公儀橋）下流辺りは、金沢市内の繁華街で両岸に人家が混み合っていることから、私橋（1人1文宛貸取有料橋）の架設の請願があった。6年前にも同じ請願があったが、川除や筏流し、養船（肥料船）などから却下されている。その後、地元の町人は、百姓から賃銭を取らないことで架設してほしいと要請があったが却下された。

（7）他国の橋梁架設を応援

1752（宝暦2）年6月

加賀藩史料第七編（政隣記）より

「大聖寺侯前田利道、三河吉田の橋成れるを以て賞を受く」

昨年12月に、大聖寺侯は三河吉田の橋の御手伝御普請に加わり、この度完成して賞をいただき帰国した。同行の家来御用掛6人も賞をいただいた。これまで他国の工事、主に治水工事や災害復旧に加わっているが、橋梁工事は珍しい。前田家は三河と縁があり、技術応援したようである。これまで応援で賞をいただいた記録はない。

吉田の橋とは、現愛知県豊橋市内の橋で、藩政期には、幕府直轄工事で行われた。東海道の武蔵の六郷、三河の矢作、近江の勢多とともに重要な橋であった。

（8）他国の橋材漂着

1758（宝暦8）年1月

加賀藩史料第八編（御年譜）より

「大聖寺藩の海岸に異国の橋材漂着したことを幕府に届出る」

異国の橋60間ばかりの橋材が打ち寄せられ、それを公儀へ届けた。

前年、韓国（旧朝鮮）では大雨が続き、さらに地震によって山河破れ、百里の海を流れて漂着したとの話があった。この時、加賀藩の浦のみならず、諸国浦々へ大量

の木材が流れ着いている。

（9）工事入札と工期

1764（明和元）年9月

加賀藩史料第八編（泰雲公御年譜）より

「犀川大橋の普請に着手す」

この年、犀川大橋が傷み、かけ架け直すこととなり、町中へ入札の触を出した。藩の積算では仮橋（雇舟14艘の舟橋）を含めて120貫になったが、75貫で落札された。予定価格の6割で落札されることは、現代でもありそうである。9月29日に着手し、11月25日に完成し、57日間を要した。前回の架け替えは27年前の1738（元文3）年で、このときは約100日要したとある。

（10）橋梁の修理

1761（宝暦11）年3月

加賀藩史料第八編（泰雲公御年譜）より

「巡見上使來たらんとするを以て金沢の橋梁を修理す」

今般巡見上使（全国の施政・民情を査察するために派遣される幕府の上使）御通行につき、橋を新しくしたり、修理などを行った。この時は市内の香林坊橋を架け替え、犀川大橋の桁はそのまま、敷板を直した。

（11）奉行の執務態度

1789（寛政元）年11月

加賀藩史料第十編（御横目方密役記）より

「犀川大橋の架設に従事する外作事奉行取調べらる」

この年犀川大橋を架け直すことになり、担当の外作事奉行2名、御大工2名ほか作業に関係する人たちは朝6時から暮れごろまで現場で仕事をしていたが、この年の11月は寒くにわか雪などが降り、川から寒風が激しく迫る状態であったため、手拭などを被り現場にいたことから、強くお叱りを受けた。奉行らしくない態度は残念である。「武士の対面を保て」と強く言われた。

（12）流失した橋材の取扱い

1820（文政3）年6月

金沢市史資料編六（御国法御用留帳）より

「流出の橋材届出方に付廻状」

城下町の犀川大橋・浅野川大橋・小橋と市内の用水や惣構に架かる橋の中で、前日の洪水で流失したものが多く、その橋材を引き上げた者は届け出るように触れを出した。

（13）橋梁現況台帳

1824（文政3）年

金沢市史資料編六（道橋帳写）より

「道橋帳写の作成」

市内に架かる橋の橋梁現況台帳を作成した。橋だけ

でなく、橋詰にある橋番所や高札場の様子もわかる。

記載の1例

枯木橋 渡4間、幅3間、左右惣構土居川縁石垣並菱垣共。

同所 橋番人前より橋台迄樋長10間、幅2尺。

同所 高札場前より橋台迄樋長11間半、幅2尺。

(図-2参照)

(14) 景気対策として架け替え

1837(天保8)年10月

加賀藩史料第十四編 (毎日帳書抜) より

「犀川及び浅野川の橋梁を改架し工匠をして職を得しむ」

両橋とも傷みはじめ、近年架け替えを予定していたが、今年大工職の仕事がなく困窮していたことから、職人救済のため当年より犀川大橋・浅野川大橋・浅野川小橋の架け替えを行うことになった。今でいう「公共事業を興して職人を救う」のは今も昔も変わらない。

(15) 管理(その3)

1840(天保11)年2月

加賀藩史料第十五編 (御郡典) より

「両本願寺別院再建の為寄進する材木運搬により橋梁を破損するなかるべきを告ぐ」

別院再建で、御郡方より寄進材木を車にて運ぶ途中、橋板などを損ない、時には橋桁など痛ませることがあり、一般の通行が難しくなることから、運搬する前に御作事奉行に説明して運ぶようにとある。

(16) 富山藩における橋の管理

加賀藩と富山藩は隣同士でつながりもあることから、富山藩の橋に関して少し述べる。

富山県史史料編や富山市史ならびに越中史料には、橋に関する多くの記載がある。中でも黒部川の愛本橋は有名でこれまでに多くの発表があることから、ここでは舟橋について述べる。

舟橋が架けられたのは1605(慶長5)年と言われ、神通川の清流に架けられ、舟橋の美観は良く知られている。舟橋は50～64艘の舟を2条の鉄鎖で結び、その上に板を敷いた。この舟橋の円滑な行き来は重要であり、番所の勤めは重要であった。たくさんある舟橋の記載の中から、次の「覚」を紹介する。

1789(天明9)年正月

富山県史史料編V近世下 (明和・天明町役所御用留抜書) より

「富山舟橋番人勤方申渡書 覚」

ここでは番所の勤め方が記されている。

①昼夜1人怠りなく勤める。

②橋詰や橋上の掃除を行う。

③他国者などは橋詰で荷を下ろし調べる。

④舟橋のカスガイ盗まれないように見守る。

⑤火の用心に注意する、

など細かく記されている⁸⁾～⁹⁾。

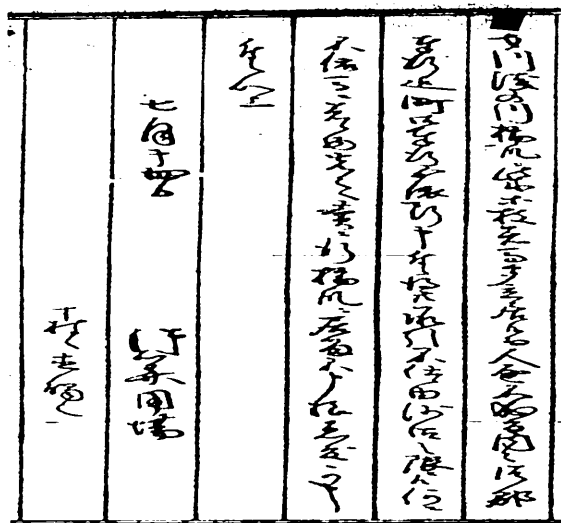


図-1 「改作所旧記」寛文元年7月の文書
(金沢市立玉川図書館蔵)

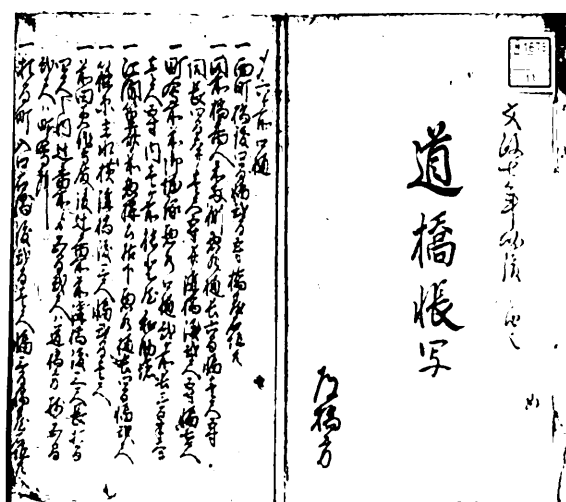


図-2 「道橋帳写」表紙と中の一部
(金沢市立玉川図書館蔵)

3. おわりに

本研究は藩政期における加賀藩の橋梁に関する建設・維持管理などについて調べたものである。

不況時の架け替えは現今の公共事業対策であり、橋梁現場での奉行(役人)の執務態度は、現代のわれわれ技術者に相通じるところがある。また橋梁(当時は木造)の管理には先人たちは苦勞して対処していたと思われる。

これら先人たちの管理に関する歴史的な事柄を調べ、次の世代へ語り継いでいきたい。今回は城下町(平地)の橋梁に限ったが、今後は手取川沿いの白山麓(山地)の橋並びに藩政期の道路管理、雪対策なども調べてみたい。

まとめるにあたり、金沢市文化財保護課の方々にご指導をいただきました。厚くお礼申し上げます。

4. 参考文献

- 1) 『加賀藩史料第一編～第十五編、藩末篇上・下』、
前田育徳会、1929～1958.
- 2) 『稿本金沢市史 市街編第一』、金沢市、
pp. 152～175、1916.
- 3) 『金沢市史 資料編 1 7 建築・建設』、
pp. 393～401、1998.
- 4) 『金沢市史 資料編 6 近世四』、金沢市、
pp. 34～748、2000.
- 5) 『城下町金沢の人々』、石川県立歴史博物館、
p. 63、79、1999.
- 6) 『明治以前日本土木史』、土木学会、
pp. 1627～1631、1936.
- 7) 『日本道路史』、日本道路協会、pp. 920～924、1977.
- 8) 『富山県史通史編Ⅲ近世上』、富山県、
pp. 392～393、1982.
- 9) 『富山県史史料編Ⅴ近世下』、富山県、
pp. 1225～1275、1974.